

- ◎は重要文化財、○は重要美術品を示します。
- 出品作品はすべて松永コレクションで、出品№1～3、6、7以外はすべて原三溪旧蔵品です。
- 「前期」の記載がある作品は、1月16日(火)～2月12日(月・振)、「後期」の記載がある作品は2月14日(水)～3月17日(日)の展示です。
- 都合により展示作品を変更する場合があります。

出品作品リスト

No	作品名	作者名・产地	品質形状	時代	法量(cm)	所蔵番号
1	志野桐絵鉢鉢	美濃焼(志野焼)	陶器 鉢	桃山時代 16-17世紀	高8.2 口径27.1	6-Ha-45
2	備前鶴首徳利	備前焼	陶器 瓶	桃山時代 16世紀	高21.1 胴径11.2	6-Ha-111
3	上野割山椒形向付 六客 上野焼(釜ノ口窯)	上野焼(釜ノ口窯)	陶器 碗	桃山時代 16-17世紀	高7.6 径11.0(各)	6-Ha-110
4	◎ 病草紙・肥満の女		紙本着色 掛幅装	平安-鎌倉時代 12-13世紀	縦25.3 橫45.1	6-B-13
5	王子形水瓶		青銅(佐波理)製 瓶	奈良時代 8世紀	高31.3	6-Hc-6
6	一月堂練行衆盤	蓮仏(生没年不詳)	木胎漆塗 盤	鎌倉時代 永仁6年(1298)	径43.4	6-Hb-23
7	根来薬器		木胎漆塗 壺	南北朝時代 14世紀	高8.5 径8.8	6-Hb-54
8	柿蒂茶碗 銘「白雨」		陶器 碗	朝鮮王朝時代 15-16世紀	高7.5 口径14.2	6-Ha-58
9	◎ 花籠図	尾形乾山 (1663-1743)	紙本着色 掛幅装	江戸時代 18世紀	縦112.5 橫49.2	6-B-36
10	芦屋菊桜地文笠	芦屋金	鋳鉄製 釜	室町時代 16世紀	高17.7 胴径25.8	6-Hc-104
11	槌目水指 青磁獅子蓋付		佐波理製 鉢	江戸時代 17-19世紀	高15.1 径17.8	6-Hc-101
12	◎ 前期 金剛般若經開題残巻	空海(774-835)	紙本墨書 掛幅装	平安時代 9世紀	縦26.7 橫43.2	6-I-1
13	◎ 後期 地獄草紙断簡・勘当の鬼		紙本着色 掛幅装	平安-鎌倉時代 12-13世紀	縦26.0 橫59.5	6-B-12
14	五鉛鉢		青銅製鍍金 鉢	鎌倉時代 13-14世紀	高17.5 口径7.4	6-Hc-22
15	○ 布袋見闇鷄図	宮本武蔵 (1584-1645)	紙本墨画 掛幅装	江戸時代 17世紀	縦71.2 橫32.7	6-B-29
16	山水図	伝・芸阿弥 (1431-1485)	紙本墨画淡彩 掛幅装	室町時代 15世紀	縦147.0 橫45.5	6-B-26
17	秋景山水図	伝・鑑貞 (生没年不詳)	紙本墨画淡彩 掛幅装	室町時代 16世紀	縦60.5 橫31.0	6-B-28



福岡市美術館
FUKUOKA ART MUSEUM

〒810-0051 福岡市中央区大濠公園1-6
TEL 092-714-6051 (代表) FAX 092-714-6071
www.fukuoka-art-museum.jp

シリーズ 茶の湯交遊録III 原三溪と松永耳庵

会期 2024年1月16日(火)-3月17日(日)

会場 松永記念館室



原三溪 (1868~1939)



松永耳庵 (1875~1971)



(出品№9)尾形乾山《花籠図》(重要文化財)

※三溪と耳庵の写真は国立国会図書館「近代日本人の肖像」 (<https://www.ndl.go.jp/portrait/>) より転載

原三溪は横浜の実業家で、自ら書画をよくし、茶人、美術品蒐集家、そして同時代の作家の活動を支援したパトロンとしても知られます。茶の湯においては益田鈍翁 (1848~1938)、松永耳庵とともに「近代三茶人」と謳われ、還暦を機に茶の湯の世界に足を踏み入れた耳庵の茶に最も強い影響を与えた数寄者の一人です。

福岡市美術館に収蔵される松永コレクションには、三溪の旧蔵品が少なからず含まれ、いずれもコレクションを代表する優品ばかりです。またそのいくつかについては耳庵の自著をはじめ、茶事の記録、インタビュー記事等に、耳庵の語りや、三溪が生前に耳庵に譲った、あるいは三溪没後に耳庵が原家から譲り受けた際の興味深いエピソードが残されています。

本展では松永コレクションの原三溪旧蔵品に焦点をあて、作品にまつわるエピソード紹介や解説を通じて、両者の交流や耳庵が三溪に寄せた敬慕の情を垣間見たと思います。

[学芸員 後藤 恒]

松永耳庵の師・原三溪

近代数寄者が著作等で茶友を紹介する際に用いる敬称には「翁」が一般的ですが、松永耳庵は原三溪を「先生」と呼んでいます。他に耳庵が「先生」と書くのは慶應義塾生時代の恩師・福澤諭吉くらいであり、それだけ耳庵は茶の湯の師として、また生き方の模範として三溪を敬慕していたことがわかります。

原三溪は岐阜県の出身で、旧姓は青木、本名は富太郎。東京専門学校（現・早稲田大学）で政治、経済、法律を学び、生糸貿易で財をなした横浜の豪商・原善三郎の孫娘やすと結婚、原家に入籍して家業を発展させました。やがては横浜興信銀行（現・横浜銀行）の初代頭取を務め、関東大震災（1923）後は、私財を投げうって横浜の復興に貢献しました。

「三溪」の雅号は善三郎の別荘「松風閣」があつた横浜本牧の地名「三之谷」に由来するとされます。三溪は周辺の土地を買い足して、全国各地の朽ちかけた優れた古建築を移築再生するなどして巨大な日本庭園「三溪園」を造営、入口に「遊覧御随意」の札を掲げて園内の大部分を一般に無料公開しました。幼少期より身につけた漢学、詩書画の素養は、実業家としての辛苦を忘れさせる嗜みとして書画制作、美術品蒐集、そして茶の湯にも存分に活かされ、園内に建てた幾棟もの茶室で茶事を開いては茶友たちと交遊しました。また横山大觀、安田鉄彦、前田青邨といった作家を支援したパトロンとしても知られます。

そうした三溪と耳庵との交流がいつから始まつたのかは詳らかではありませんが、三溪が初めて耳庵を招いた茶事が昭和10年（1935）6月3日（月）であること（齋藤清『原三溪』191頁）から、耳庵が茶の湯に親しみ始めて間もない時期、それも恐らくは耳庵を茶の湯の世界にいざなった益田鈍翁の紹介であったと思われます。三溪が没するのは昭和14年（1939）8月16日、約4年間の深く短い交流でした。

耳庵は三溪の茶について、鈍翁の茶と比較して「其の異なる点は、省略主義であった」と述べ「淡茶（薄茶）が出た事がない。又懐石の食器にしても、唯だ一品何か光ったものはあるが他は多く木の箱、陶器なら今焼と云った風であった。」と例示しています（『日本の茶道』昭和14年12月号・33頁所載「隨筆 鈍翁・三溪の茶（下）」）。耳庵が宗とした侘び茶、それも因習的な作法にこだわらない、生活に密着した現実主義的あるいは実践的ともいえる茶に、三溪の美意識が与えた影響は計り知れません。

「三溪先生招待」

昭和10年（1935）11月2日（土）条

出典：松永耳庵『茶道三年』上巻・23～24頁

【招客】原三溪、田中親美、中村好古、京都吉富ひさ
◆待合床：本阿弥光悦消息 ◆本席床：紀貫之筆名家歌集切【懐石】飯：うずらめし／汁：干大根・三州味噌／向：生からすみ・しめじ（器は絵唐津）／焼物：白河（備前一文字）／強魚：小芋（朝鮮唐津舟形）／八寸：隱元胡麻揚（志野鉢〔出品1〕か）／酒器：備前徳利（出品2）【濃茶】炉：霰釜／水指：備前／茶碗：志野銘「淡路島」【同夜の献立】割山椒の向付（出品3）に、子持若布／蝶の絵の猪口に鯛昆布〆／椀：蕎麦／鱈、豆腐、松茸、しめじのチリ等…

耳庵が埼玉に築いた別荘「柳瀬山荘」に、初めて三溪を招待した時の茶事の記録です。耳庵が破竹の勢いで茶道具の名品を蒐集し始める前のこと、それまでに蒐集した茶道具を駆使して昼夜にわたり精一杯もてなした様がうかがえます。出品1～3はその時に用いたと思われるものです。「主翁（三溪）は初めての来荘とて殊の外、武藏野の景色を愛賞せられ懇意な相客と打興じられ八時頃帰浜の途に就かれたのは主人として此上なき満足であった」と述べています。

この一年半後の昭和12年（1937）4月、耳庵は三溪より茶亭「春草廬」を譲り受けて山荘内に建て、その棟上げとして三溪を招いた茶事を開いています（『日本の茶道』昭和12年6月号所載「瑞軒棟上の茶」）。「春草廬」はもともと江戸時代前期の商人・河村瑞軒が河川開鑿の折に休憩所として建てたとされるもので、東京国立博物館の敷地内に現存しています。福岡市美術館にはその茶室の一部を再現した展示コーナーが設けられています。

「御主人を驚かせて上げなさい」

昭和13年（1938）8月23日（火）

出典：邑木千以『愛蔵弁あり』7～9頁、齋藤清『原三溪』219頁、『没後50年 松永安左工門の茶』75頁

平安・鎌倉時代の絵画の名品《病草紙断簡・肥満の女》（出品4）は、三溪が入手後間もなくして耳庵に譲ったものです。三溪は毎年夏に三溪園内に咲き誇る蓮を愛する茶事を開いていましたが、この年耳庵は出張のため出席できず、妻の一子が代理で参加しました。茶事が終わり、辞去しようとする一子に三溪は「今日は御主人がお見えにならなくて淋しかったが、びっくりするようなものをお世話するから、黙って持って帰って、御主人を驚かせて上げなさい」と本作を手渡したのです。耳庵は「先輩の厚志を忘れないため、これは博物館に寄附せずにおきました」と、戦後、国（東京国立博物館）に一括寄贈した品々の中からは本作を外し、終生愛蔵したのでした。

待ちわびた「三溪さんの天平水瓶」

昭和12年（1937）6月10日（木）条

昭和30年（1955）9月18日（日）条

出典：松永耳庵『茶道三年』下巻・1～3頁、仰木政斎『雲中庵茶会記』下巻・526～528頁

法隆寺伝来とされる《王子形水瓶》（出品5）は、「三溪さんの天平水瓶」と呼び親しまれていました。耳庵は本作を初めて眼にしたのは昭和12年（1937）の初夏、三溪園の茶事に招かれた時でした。露を含むオオヤマレンゲを活けたその姿に「花入の宝器と云い、花の清香と云い正に美の極致なりと申すべし」と賛辞を惜しません。

三溪の没後、耳庵は本作を原家に懇望し続け、その念願かなって昭和30年（1955）の秋、ついに譲り受けることとなりました。その際、床に《病草紙・肥満の女》（出品4）を掛け、さらに東大寺伝来の《二月堂練行衆盤》（出品6）を盆として用意し、原家からの水瓶の到来を待ちわび、到来後は《根来葉器》（出品7）を用いて茶を点て客人をもてなしたことが『雲中庵茶会記』に記録されています。

「實に柿蒂中の優品」

昭和12年（1937）12月4日（土）条

出典：松永耳庵『茶道三年』下巻・78～79頁、『雲中庵茶会記』下巻・668～672頁

《柿蒂茶碗銘「白雨」》（出品8）は、幾種もある高麗茶碗において「柿蒂」を代表する茶碗の一つです。三溪園内の茶室「蓮華院」での茶事で本作を愛でた耳庵は「天目なりで全く無疵、口辺はキッと立上って、胴以下は斜線を以て底部に締る。高台は稍々高くて、高台の裡へ釉薬流れあり、兜巾面白く、實に柿蒂中の優品というべきである」（ルビは筆者）と、姿、釉調、高台の作りなどの造形的特徴を丁寧に描写しながら評価しています。ちなみにこの時、本作の替えとして「木枯」という同じ柿蒂茶碗が用意されており、キズなく破綻のない「白雨」と、割れのある「木枯」を比べて、後者を賞した耳庵に対し、同席していた森川如春庵から「白雨の綺麗寂びの味が解らぬようでは茶人の資格はない」とたしなめられたことを自ら記しています。

本作に附属する耳庵の添え文に「丁酉晚秋」すなわち昭和32年（1957）の晩秋とあり、『雲中庵茶会記』における初出も同時期（下巻・同年10月16日条「耳庵翁名残名茶筵」）で「（耳庵）翁熱望三溪翁愛蔵の白雨」と紹介されています。よってこの頃に耳庵は、三溪の没後18年を経て本作を入手したと思われます。

「晚秋初冬の庵室に之れ以上の一軸なし」

昭和13年（1938）10月28日（金）条

出典：松永耳庵『茶道春秋』下巻・14頁、仰木政斎『雲中庵茶会記』下巻・668～672頁

尾形乾山《花籠図》（出品9）は、籠に入った桔梗、女郎花、野菊、薄を巧みに配した構図、上部には「花といへば千種ながらに/あだならぬ/色香にうつる/野辺の露かな」と三条西実隆の歌を自筆しています。秋草のイメージと和歌が奏でるリズムが見事に融合した、乾山の絵画作品を代表する一品です。

耳庵は昭和13年（1938）秋に三溪園にて本作を眼にした時の感想を、次のように述べています。「露重たげの刈萱が負ひ籠の、あるは傾き、あるは倒れ、それに讃歌の気持も其風韻に出で、何処となく寒煙にすだく蟋蟀の声も聞えて来る様で、晚秋初冬の庵室には之れ以上の一軸なく、何は扱て、一切の他を圧して独り主翁と肱を把って一座に臨むの概がある。」（ルビは筆者）と。

作品が放つ魅力を席主三溪の存在に照らすほど、ひとしおの感激であったことがうかがえます。耳庵は「白雨」（出品8）と同時期、昭和32年（1957）に本作を手に入れたと思われます。というのも先に紹介した『雲中庵茶会記』昭和32年（1957）10月16日条の記録では、出品8で茶を振舞った後に、客人を広間に通し、床に掛かった本作を披露、一同を驚愕させているのです。『雲中庵茶会記』の著者・仰木政斎はこの時のことを「柿の蒂にて度肝を抜かれた余は、原家でもこの花籠は容易門外不出とまで聞きしを如何に強引な耳庵翁たり共、マサカと想いしに、今日茶碗と共に翁の床に懸るとは驚かざるを得ない一ト時であった。」と興奮気味に記述しています。

その後、本作は出品8とともに、耳庵の秋の茶事の定番として愛用されました。

参考文献

- 松永安左工門『茶道三年』（飯泉仁兵衛発行、1938年）
- 松永安左工門『茶道春秋』（日本之茶道社、1944年）
- 邑木千以『愛蔵弁あり 古美術蒐集家訪問記』（浪速社、1965年）
- 仰木政斎『雲中庵茶会記（影印本）』（味岡敏雄編集・発行、1997年）
- 「没後30周年記念特別展 松永耳庵コレクション」（福岡市美術館・東京国立博物館、2001年）
- 齋藤清『原三溪 偉大な茶人の知られざる真相』（淡交社、2014年）
- 『淡交「特集 原三溪、その生涯と茶の湯」』（淡交社、2019年7月）
- 『原三溪の美術 伝説の大コレクション』（横浜美術館、2019年8月）